

高崎市立美術館における
連携事業の実践に関する報告Ⅱ
—— 生涯学習としてのイラスト制作の可能性 ——

奥 西 麻 由 子

Report on the Practice of Collaboration Project
in Takasaki City Museum Ⅱ
—— The Possibilities of Illustration Production as Lifelong Learning ——

Mayuko OKUNISHI

群馬県立女子大学紀要 第45号 別刷

2024年2月

Reprinted from

BULLETIN OF GUNMA PREFECTURAL WOMEN'S UNIVERSITY No. 45

FEBRUARY 2024

JAPAN

高崎市立美術館における 連携事業の実践に関する報告Ⅱ

—— 生涯学習としてのイラスト制作の可能性 ——

奥 西 麻 由 子

Report on the Practice of Collaboration Project in Takasaki City Museum Ⅱ
—— The Possibilities of Illustration Production as Lifelong Learning ——

Mayuko OKUNISHI

I はじめに

本研究は、筆者が平成25年度から継続して群馬県内における美術館連携事業を進めてきた実践のうち、昨年度、高崎市立美術館で行った事業の報告を行うものである¹⁾。本事業は本学の「特定教育・研究費」を活用したもので、学生が美術館の企画展示を踏まえ、教育普及事業の企画を立案し、実践するというもので、アートマネジメントゼミ及び授業受講生が活動に携わっている。例年表題の美術館以外にも群馬県立近代美術館、館林美術館、富岡市立美術博物館、大川美術館等の館において実践を行っている²⁾。

2020年に本誌（41号）で報告した高崎市立美術館の実践においては、学生が夏の企画展に作品展示ボランティアや学芸員実習の一環として教育普及事業のサポートを行うという、それまでの連携事業のかたちには見られなかったものを報告した。引き続き、本稿では先述の実践とは系統が異なることから、その高崎市立美術館において、2022年度に行った「ミュシャのイラスト入門」というワークショップの実践報告を行う。具体的な新規性としては、プログラムの開発に関して大人を対象として新たに内容を吟味する必要があったことが挙げられる。これまでの連携事業では主たる参加者が幼児から小学生という低年齢の層であったのに対し、本事業の参加者は大多数が大人であった。また、イラストというジャンルは個人が趣味で嗜むことはあっても、美術館のワークショップの題材に取り上げられることは極めて少ないことも挙げられる。以上の二点から、本事業のプログラムが、幅広い年齢層を対象とした、生涯学習としてのイラスト制作の可能性を見出すことが出来ると考えられる。

II 展覧会概要

1. 高崎市立美術館の概要

高崎市美術館は、経済的、物質的に豊かな社会を築いてきた近年において、精神的に充実した心豊かな生活を享受したいという市民の要望に応え、高崎の芸術文化の主要施設となるべく平成3年7月に開館した。美術館では、市民の貴重な文化資産である収蔵作品を広く市民に鑑賞してもらうとともに、絵画、彫刻、デザインなどさまざまなジャンルの展覧会を年間5回開催している。また敷地内には、高崎市の事業家・井上房一郎の旧邸であり、井上と親交のあった建築家アントニン・レーモンドの建築スタイルを色濃く残す旧井上房一郎邸を併設し、庭園を見学することも出来る³⁾。

(図1、2)

館の収蔵作品は油彩等が531点、水彩・素描が161点、版画が787点、写真が43点、彫刻が72点、ガラス5点の計1599点（2022年3月31日現在）⁴⁾で、鶴岡政男、豊田一男、中村節也、松本忠義、山口薫ら高崎市内をはじめ、県内ゆかりの作家から、海外の作家まで多くの作品を収蔵している。

また、企画展示に合わせて様々な教育普及事業を行っている。おおよそ一つの企画展示につき、学芸員によるギャラリートーク（2回程度）、作家本人によるギャラリートーク（1～2回程度）、出品作家もしくは関連する講師によるワークショップ（1回程度）が行われている。そのほかの事業としては、講演会、美術館コンサート、博物館実習の受け入れ、市内小学校を対象とした作家・学芸員による連携授業、学校団体の受け入れ、中学・高校生の職場体験の受け入れ、学芸員のアウトリーチ（学校等への出張講座）等が挙げられる⁵⁾。以下は概要である。

住 所：〒370-0849 群馬県高崎市八島町110-27

電 話：027-324-6125

アクセス：JR 高崎駅西口より徒歩3分

開館時間：10：00～18：00 金曜日は20：00まで

休 館：月曜、月曜日が祝日の場合は月曜日開館し翌平日休館、祝日の翌平日・展示替期間・年末年始休館



図1 高崎市立美術館概観



図2 旧井上房一郎邸

2. 「アルフォンス・ミュシャ展 美しき時代の女神たち」の概要

本稿で報告するワークショップは表題の企画展示の関連事業として開催された。展示概要は以下のとおりで、図3は展覧会チラシである。

チェコ出身のアルフォンス・ミュシャ（1860-1939）は、挿絵などの仕事をしながら絵画を学び、1887年にパリに移りました。1894年末にミュシャが制作し翌新年からパリの街を飾った、フランスの国民的女優サラ・ベルナール（1844-1923）の演劇ポスターがセンセーションを巻き起こし、ミュシャは一躍アール・ヌーヴォーの寵児となります。ミュシャの生み出す華やかな女性像と渦巻く植物文様を組み合わせたイメージは、瞬く間にヨーロッパとアメリカを席捲しました。東の間の平和と華やかな都市文化を謳歌したパリの、19世紀末から20世紀初頭の時期は「ベル・エポック（美しき時代）」と呼ばれます。ミュシャの描く女性たちはまさに、ベル・エポックの女神たちだったと言えるでしょう。



図3 展覧会チラシ

本展覧会では、ミュシャ作品の世界的なコレクターとして知られる尾形寿行氏のコレクションを中心に、流麗な女性像を描いたポスターや装飾パネル、生活に寄り添う菓子や香水瓶といったインダストリアル・デザインまで、約300点をご紹介します⁶⁾。

会 期：令和4（2022）年9月23日（金曜・祝）～11月27日（日曜）
主 催：高崎市美術館
後 援：チェコ共和国大使館、チェコセンター東京
協 力：OZAWA コレクション、OGATA コレクション
企画制作：株式会社文化企画
観 覧 料：一般：600（500）円、大学・高校生：300（250）円
※（ ）内は20名以上の団体割引料金
関連事業：コレクターによる講演会、ワークショップ「ミュシャのイラスト入門」、学芸員によるギャラリートーク

Ⅲ ミュシャのイラストレーションの特徴

初期のアール・ヌーヴォー時代のアルフォンス・ミュシャは、ポスターをはじめ雑誌の表紙イラスト、油彩画、彫刻など数多くの芸術作品・商業作品を手掛けたが、本報告で取り上げるワークショップではイラストを題材に扱ったため、ここではミュシャのイラストレーションの特徴を挙げていくこととする⁷⁾。

イラストレーションとは今日の現代美術用語によれば、「新聞、雑誌、書籍、広告などの印刷物に使用される挿絵や図解のこと。印刷物の内容を補完したり、説明したり、読者の注意を引いたり、時には紙面を装飾することをその目的とする。したがって漫画、絵画、装画などであっても、メディアによってはイラストレーションとして見なされることもある。」⁸⁾ものである。ミュシャが活躍した19世紀後半は、数多くの文学作品に芸術的な挿絵が添えられ、ヨーロッパにおいてイラストレーションの表現が拡大した。また、印刷技術の大型化に伴い、ポスターが登場したこともその拡大の一端を担っている。ミュシャのポスターには商品を宣伝する文字が入ったものと、部屋に飾って楽しむ文字の入っていない装飾パネルの二種があり、アート作品としてコレクターアイテムともなり、別増刷されたという⁹⁾。このように、ミュシャのイラストレーション作品は、時代の変化と技術革新と共に、大衆へ届き、人気を博したといえよう。

次に高崎市立美術館の企画展示でも展示された、地中海のパカンスに誘うパリ・リヨン・地中海鉄道の観光ポスターである「モナコ・モンテカルロ」（図4）のポスターを例に、そのイラストレーションの特徴を考察していく。一つ目にマットな色使い、二つ目に強弱のある線と太い輪郭線、三つ目に美しい女性の姿とそれを取り囲む模様である。マットな色はリトグラフの版画作品独特のものともいえるが、数多くの色を用い、細部まできめ細かく仕上げられている。また、人物や植物などの線は一定の太さであるが、輪郭線は太く、画面を引き締める効果があると見受けられる。そして、ポスターの中心的存在である女性と、周囲の曲線及び草花の装飾的な構成が成されている。千足は「ミュシャの場合、装飾とデザインはほぼ同義語とっていいが、他の追随を許さないミュシャの装飾とデザインの独自性は人間にしろ、動物にしろ、自然主義的でありながら、これを巧妙に『様式化』して異次元の装飾、デザインの域に高めている」¹⁰⁾と述べている。



図4

「モナコ・モンテカルロ」
リトグラフ 1897年

Ⅳ ワークショップの実践

1. ワークショップ実施に至る背景

高崎市立美術館との美術館連携事業は、例年同様のかたちで実施するのではなく、要請があった際にその都度筆者と担当学芸員と相談をしながら、柔軟に事業を展開してきている。そのため、美術館のほうで企画展示が決定し、関連事業を詰める段階となつて、具体化していくことが多い。

今回の事業に関しては、先方の学芸員から2022年7月25日にメールで相談を受けた。その際、当初はイラストレーターによるイラストのワークショップと、本学のワークショップの2件を検討していたというが、イラストの方は講師の都合で開催不可となつてしまったため、本学のプログラムで「ミュシャ風のイラストを描く方法を身につける」という内容が出来ないかと打診を受けた。またミュシャの作品が好きな人々から「ミュシャ風のイラスト入門を行いたい」というリクエストが多く、本展中に何らかの形でイラストのワークショップができないかと模索しているということであった。

この相談を受け、メールで数回のやり取りを行った後、チラシに掲載するワークショップの日程と事業タイトルを決定した。タイトルは「ミュシャ風イラストを描いてみよう」とし、主な参加対象が大人ということで、時間を90分～120分くらいに設定すること、ミュシャの絵の要素を分析し、特徴をつかんでから制作に入ること、参加者の技術によっては、モチーフを組み合わせ、カラーージュした作品をトレースし、色を付けることなどといった具体的な案を伝えてから、8月13日に美術館で打ち合わせを行った。ここではメール内容の確認と、実施に向けた詳細のアイデア、筆者が試作をした作品を提示し、当日までに美術の教員免許取得を目指す「美術科教育法Ⅲ」の受講生と共に作品の試作を制作し、当日は活動をサポートするスタッフとして参加すると予定を立てていった。

2. 「美術科教育法Ⅲ」におけるワークショップ内容の検討と試作

① 授業の概要

本科目は教職科目であり、中・高等学校教員免許（美術）の取得を目指す学生が履修するものである。後期に開講され、本年の受講生は2年生4名、3年生1名の計5名である。シラバスにおける授業の内容（概要）は、「美術科教育法Ⅰ、Ⅱを踏まえ、中学校美術科の表現活動について発展的な技法、題材開発を習得する」、授業の目的は「美術科の授業を自分なりに構想し、実践する力を伸ばす。」、到達目標は「中学校美術科の「A. 表現」について学習指導理論を深く理解し、具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける。」¹¹⁾と記載してある。

具体的には学習指導要領の「A. 表現」に関して、アクティブ・ラーニング、ICTの活用、共同制作といった三つの観点から、学校現場で応用可能な題材を検討し、その学習指導案を書くことが出来るよう授業を進めていく。その中で学生たちは個々に題材を考え、素材を扱いながら試作を重ねたり、中・高校生が題材の中で使用できる材料を検討したりと、現場の状況に合わせた題材を模索している。時には少人数の授業のため、複数人で話し合いながら、上記の事柄について検討を重ねている。

今回のワークショップを本授業で扱うこととした理由は、先に述べたアクティブ・ラーニング¹²⁾の観点から有意義であると感じたためである。学生たちにも馴染みの深いイラストについて、美術館でのワークショップをきっかけに題材化の視点を持つことと、参加対象となる様々な人々と関わることで、今後教育実習に赴く際、生徒への声がけや、制作に対する支援の仕方など、実地で体験を積むことが出来るためである。活動全般を通して、アクティブ・ラーニングに含まれるグループ・ディスカッション、グループ・ワーク、自ら制作する、人に教える等の内容を踏まえることになる。

② 第一回授業（10月17日）

後期最初の授業日（10月3日）のガイダンスでは、美術館で本ワークショップ内容の検討を行ない、会場でサポートを行ってもらうことを予め伝えた。

そして第一回目となる本日は、ワークシート（図5）に沿って、①アクティブ・ラーニングとは何かという基礎的な講義を行い、授業を受ける側が能動的に取り組む具体的な方法を伝えた。次に②では、ワークショップの試作制作を行うにあたり、ミュシャの作品を鑑賞し、話し合いながらその特徴を考えてもらった。その際、ミュシャの作品集や展覧会チラシを用い、じっくりと作品を見て分析した結果、学生たちは「デザイン化された植物と人物」、「淡い色使いとはっきりと強弱がついた線」、「平面的な構図」、「アール・ヌーヴォー的な曲線的な装飾」、「魅力的でふくよかな女性たち」といった「Ⅲ ミュシャのイラストレーションの特徴」でも示した特徴を見出し、記述していた。その後、イラストが上達するにはどのようなことに気を付けたら良いか、という疑問を投げかけ、自身の経験を踏まえながら話し合い、検討した。そこでは、「うまい人の作品、気に入った作品を真似して描く」、「画材を工夫する」、「写してみる」、「たくさん描く」、「好きな作品をじっくり鑑賞し、描き方をYouTubeなどで調べる」といった方法が挙げられた。その後、③において、筆者が考案したワークショップ当日の流れについて、意見を出してもらい、この手法で進めていくことと決定した。本授業では最後に、筆者が用意したミュシャの画集の作品コピーから、気に入ったものを数点選択し、A4サイズの用紙にコラージュをしていった。（図6）

美術科教育法Ⅲ アクティブラーニングを取り入れた表現活動		2022/10/17～31
学籍番号	氏名	
① アクティブラーニングについてのメモ		
② ミュシャ風イラストを描いてみよう！（高崎市立美術館 WS）試作制作 ・ミュシャの作品を鑑賞して、話し合いながら特徴を三つ挙げてみよう。		
特徴①		
特徴②		
特徴③		
③ 実践してみよう 1) 作品鑑賞 2) 画像選択、コラージュ 3) トレーシングにうつす or 模写 4) オリジナリティの検討 5) 着色 ④ 制作を終えて考えてみて思ったこと、感じたこと		

図5 授業のワークシート



図6 学生のコラージュ作品

③ 第二回授業（10月24日）

前回に引き続き、第二回目の授業では試作の続きを行なった。コラージュした紙の上にトレーシングペーパーをのせ、マスキングテープで固定をして、ミュシャの絵の線をペンでトレースしていった。繊細な線が多いため、学生たちは授業時間内、集中してトレースを行っていた。また、早めにトレースが終了した学生は、着色に進んだ。着色はミュシャのイラストレーションの表現に近づけるよう、コピック¹³⁾を使用した。

④ 第三回授業（10月31日）

ワークショップ前の第三回目の授業では、試作の作品制作を引き続き行い、授業の後半では完成したそれぞれの作品について発表を行った。（図7～9）各自が工夫した点、うまくいった点、課題とした点などを挙げ、お互いの作品を鑑賞した。発表後には、実際にこの手法で制作を行なう際、ワークショップ参加者に注意を促す点や配慮すべき点を検討した。そこでは、「線をトレースするのは無になり楽しいが、二時間では時間が足りないかもしれない。」「着色についてはコピックの画材体験くらいの時間になるだろう。」「コピックを予め持っている参加者は少ないことが予想されるので、色鉛筆も用意しておいたほうがいい。」「トレースしたトレーシングペーパーは少し厚めの上質紙に印刷することで、コピックのインクが裏に写りにくくなるが、その際に下に敷く新聞紙などが必要」といった具体的な事柄が挙げられた。お互いに配慮すべき点を確認したうえで、ワークショップ当日は初めて参加者と接することとなるので、参加者への声かけの仕方や発話例などを筆者が伝え、当日に備えた。



図7 発表をする学生たち



図8、9 完成した参考作品

3. ワークショップの実施

① ワークショップ概要

ワークショップは当初11月6日の午後開催としてチラシに表記を行ったが、予約開始早々に定員を上回る応募があったため、美術館の依頼で、急遽11月20日にも午前の回、午後の回と実施することとなった。また、受講生の学生はいずれかの回に一度参加することで、授業一回分とし、11月21日（月）の授業を休講とした。以下がワークショップの概要である。

内 容	アルフォンス・ミュシャの作品に登場する人物や花々などの特徴をとらえて、ミュシャ風のイラストに挑戦する。
期 日	2022年11月6日（日）14時～16時、11月20日（日）10時～12時、14時～16時
場 所	高崎市南公民館 5階 講義室
定 員	10名（チラシにはそのように掲載したが、応募者多数のため各回15名まで受付）
対 象	一般（小学生3年生以下は保護者同伴）
参 加 費	300円
講師、協力：奥西麻由子、群馬県立女子大学「美術科教育法Ⅲ」受講生	

② ワークショップ当日の流れと内容（全日共通）

各回開始時間30分程度前に筆者、美術館担当学芸員1名、職員1名、学生1～2名が集合し、会場となる高崎市南公民館の準備を行った。そこでは机、椅子の配置、ワークショップで使用する備品（ミュシャの作品コピー、画集、はさみ、スティックのり、上質紙、トレーシングペーパー、ペ

ン、コピー用紙、コピック、色鉛筆）の準備、ホワイトボードへの板書と参考作品の掲示、当日の流れや動きの確認を全員で行った。

2時間のワークショップ内容は以下のとおりである。（ ）内は午後の時間を示している。

10：00～（14：00～）	開始の挨拶、講師・学芸員・職員・学生の紹介
10：05～（14：05～）	ミュシャの絵の魅力を参加者に付箋に書いてもらう
10：10～（14：10～）	講師による話：ミュシャのイラストレーションの特徴について、 イラストの上達方法としてのトレースについて 本日の活動内容と制作の進め方について
10：20～（14：20～）	参加者の活動：コラージュ作品の選択→用紙にコラージュ→トレーシングペーパーにトレース→コピー機で2部コピーした紙に着色 *その間順次講師、学生は制作のサポート
11：50～（15：50～）	終わりの挨拶、制作のアドバイス、アンケート回答 *その後、時間があれば30分程度は会場に残り、制作も可とした。

③ 第1回 11月6日（日）の様子

第1回目は定員を上回り、会場に入れる15名の参加者があった。（図10、11）前述の流れに沿って、活動を進めていったが、講師の話が終わると早速集中してコラージュに取りかかる様子が見られた。ミュシャの展覧会を既に鑑賞した人もいれば、見ていないという人も半数程度いた。制作のスピードは個々により差があったが、大半がトレースの終了まで時間内に進められた。中にはコラージュ作品の配置でとても悩んで、2種試作する人もいた。その際学生も声をかけたり、構成や選んだモチーフについて、「いいですね！」と講師が褒めることで、迷いが自信につながる様子も見受けられた。トレースの制作中は会場内が静まり返り、集中して取り組む様子が見られ、終了時刻以降も残って制作する人もいた。着色は数名しか進めなかったが、コピックを試す様子や、「家で続きを行ってみたい」という参加者も多かった。



図10 コラージュをする参加者



図11 コラージュ作品を配置する様子

④ 第2回 11月20日（日）午前の様子

第2回は親子を含む10名の参加があった。小学生から60代まで前回同様に活動を進めたが、年齢の差は感じられず、制作はスムーズに行われた。（図12）やはり、トレースの制作は、全員が集中してミュシャの線を黙々となぞっていく様子が見られた。また、今回は着色に進んだ人も数名おり、学生はコピックの使用方法を伝え、どんなテクニックを使うとにじみの表現ができるかなど体験をもとに参加者とコミュニケーションをとる様子がみられた。（図13）参加者は「線が多くて疲れる、でも夢中になる」と口をそろえて呟いていた。参加者の作品例は図14に示した。



図12 学生が作業を手伝う様子



図13 画材の紹介



図14 参加者の作品

⑤ 第3回 11月20日（日）午後の様子

次いで第3回では親子を含む14名の参加があった。参加者が付箋に書いたミュシャの絵の魅力（図15）には、「華やかな女性」、「美しくてきれい」、「曲線美、構図」、「色使い」などが多く挙げられた。参加者の共通認識としてこれらの要素が見られることが分かる。本回では4歳の子どもも参加しており、ハサミをうまく使ってコラージュをする様子や、集中力が続く限りトレースにも挑戦していた。（図16）夫婦や親子といった家族での参加が多かったが、コラージュやトレースといった制作は、どの世代でもさほど難しくはなく、気軽に取り掛かれる様子が見られた。参加者の作品例は図17～20に示した。



図15 参加者が書いた付箋



図16 親子3世代で制作する様子



図17 コラージュ



図18 着色



図19 コラージュ



図20 トレース

4. 考察

① 参加者のアンケート結果

本ワークショップの内容や手法の効果を検証するために、参加者にアンケートを行った。結果は以下にまとめた通りである。(回答数27枚)

① ご参加された方 お住まい

高崎市	玉村町	さいたま市	男性	女性
24	2	1	2	25

② 性別

③ 年代

～10代	10代	20代	30代	40代	50代	60代
3	4	3	5	6	0	5

④ ワークショップについてどこで知りましたか？

チラシ	美術館ホームページ	友人、知人より	その他（市報）
15	1	3	7

⑤ ワークショップに参加したきっかけを教えてください（複数回答可）

ミュシャが好きだから	16
ワークショップが好きだから	6
イラストが好きだから	9
イラストがうまくなりたいから	6
その他（友人のすすめ）	1

⑥ ふだんからイラストを描かれることがありますか

よく描く	たまに描く	どちらともいえない	あまり描かない	まったく描かない
6	8	0	3	9

⑦ イラストについてのあなたの意識を教えてください（複数回答可）

好きで得意	6	上達したい	7
好きだけど得意とはいえない	10	特に何も思わない	1
好きだけの苦手	5	その他（描く機会がない）	1

⑧ 本日のワークショップについて

1) コラージュ（難易度）

（楽しさ）

やさしかった	どちらともいえない	むずかしかった	楽しかった	どちらともいえない	楽しくなかった
8	8	9	22	2	1

2) トレース or 模写（難易度）

（楽しさ）

やさしかった	どちらともいえない	むずかしかった	楽しかった	どちらともいえない	楽しくなかった
3	5	18	24	1	0

3) 着色（難易度）

（楽しさ）

やさしかった	どちらともいえない	むずかしかった	楽しかった	どちらともいえない	楽しくなかった
5	6	7	15	3	0

⑨ 本日のワークショップの満足度を教えてください

とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
19	8	0	0	0

⑩ これから描いてみたいイラストなどあれば教えてください

- ・動物・アニメ・自宅にミュシャの絵があるので引き続き楽しみたいと思った。 ・ゆるキャラ
- ・すずめの戸じまり ・推し（マンガ） ・似顔絵風のイラスト ・浮世絵
- ・年賀状や手紙に生かせるイラスト ・機械の絵

⑪ 本日のワークショップの全体の感想を教えてください

- ・親切に説明していただき楽しめた。
- ・とても集中できる時間でした。
- ・苦手でもトレースで楽しくできました！
- ・人の体の描き方などがよくわかった。ミュシャの絵のすばらしさを感じられた。色を付けるのにとっても楽しかった。
- ・なぞったりするのがむずかしくてぬるのはとても楽しかった。
- ・はじめにポイントを伝えてくださり、そこからワークショップに入ったのでわかりやすかった。トレースも楽しかったけど、最後に少しコピックを使用させてもらってより楽しかったです!! ありがとうございます!!
- ・コラージュをするとは思わなかったが、初挑戦で楽しかった。教室中のふんいきもよかった。ワークショップの回数を増やしてくれてありがとうございます。
- ・とても楽しく参加できました!!
- ・とても楽しめました。集中する機会があまりないため、とても良い体験でした。
- ・あっという間の二時間で、とても楽しくできました。
- ・楽しかったです。家でもやってみようと思いました。
- ・絵が細かいので時間が足りない。無心になるのでよい。
- ・楽しかったです。もう少し時間が欲しかったです。また参加してみたいです。ありがとうございます。
- ・とても楽しかったです。先生も助手のかたも親切で優しく充実したよい時間が過ごせました。ありがとうございます。
- ・孫と参加したので自分も参加するとは考えていなかったのです。ミュシャはハンガリーの美術館で見ました。ステキです。
- ・楽しく描けました。ありがとうございました！
- ・楽しかった。
- ・塗り絵を配布されるとおもったので、自分でコラージュ出来て楽しかった。
- ・久しぶりに絵を描いたので、とても楽しかったです。スタッフの皆さんもとても親切で楽しい時間を過ごすことが出来ました。またこの様なワークショップを続けていただきたいです。
- ・未知の世界をどう進めていくのか新しい発見や楽しさを教えていただきました。ありがとうございました。
- ・楽しかったです。
- ・たいへん楽しかったです!!

② 考察

アンケート結果①～③をみると、高崎市内に居住する女性が多く、年代は10代以下から60代と幅広くあったが、20代以降の大人の参加者が7.5割程度を占めていた。当初は、イラストに日常から親しんでいる人の参加が多いのではないかと懸念し、ワークショップの内容をどこまでのクオリティにして、参加者の満足度を高められるかと思索していた。しかし、⑤、⑥を見ると、普段からイラストが好きでよく描いているという人ばかりではなく、「まったく描かない」という参加者も多かった。ミュシャが好きであることやワークショップが好きという理由から参加に至ったようである。また、⑦によると、「好きだけど得意とはいえない」という人が最も多く、今回の活動に参加し、イラストについて興味を高めたいという意欲があることが分かった。

全体の結果として、⑧、⑨を見ていくと、コラージュやトレースといった制作は、難しく感じる人もある程度いたが、その難しさが逆にワークショップ全体の満足度を高めることが出来たと感じる。活動の中で、コラージュでは、ミュシャの作品をじっくり鑑賞し、自分なりのアレンジを加えることで、オリジナリティーを見出すことが出来る。その後のトレースでは、どの世代の人が行うにしても、集中し、没頭する様子が見られた。今回は大人の参加者が多かったため、日常生活において、そのような機会を作ることが少ないという点も挙げられるだろう。このトレースというひたすら線をなぞる行為は、写経のように、無心になり、自己と向き合う時間の創出にもつながったと言える。このことは、⑩にみられた個々の感想「楽しく描けた」、「楽しかった」、「とても集中できた」、「充実した時間を過ごすことが出来た」という回答にも表れていると感じる。同時に学生のサポートに関しては、「親切で優しくかった」、「教室内の雰囲気が良かった」という回答が多く、適切な声掛けや制作の補助がなされていたことが伺える。

③ ワークショップ活動後の学生の感想と考察

次に、活動に携わった学生の感想（図5、ワークシート④）を以下にまとめた。制作を終えて思ったことや感じたことを自由に記述してもらった。（学年は2022年当時）

- ・ ちょっと大変だったけど。楽しく作業できたのでとても楽しかったです。いつのまにか3時間くらい作業をしていたので少し疲れました。ワークショップでも、参加者がみんな真剣に取り組んでいて楽しんでいたようなので良かったです。（3年）
- ・ 私は実際ワークショップを行ってみて、ワークショップをやらないと分からない楽しさや難しさがあり貴重な経験が出来ました。体験に来てくださった方とお話することや、作っている作品を見るのは、そういう見方もあるのか、そのコラージュは思いつかなかったなど新しいことが分かり楽しかったです。難しかったのは、手が止まっている人にアドバイスをすることです。必ずしも自分の考えがその人に沿っているとは言えないことが分かりました。一人一人に合った様々な見方が出来るようになりたいと思います。（2年）
- ・ 完成した時のことを考えながらコラージュするのが楽しかったです。一番大変だったのは線画で、雑な性格が出てしまう部分でした。色塗りも自分の中では少し自分の中では少し失敗したかな、と思う部分もあったのですが、全体的には非常に良い経験になったと思います。（2年）
- ・ 鑑賞だけでは気づくことが出来ない部分を写して描いてみることで気づけることがたくさんあり楽しかった。塗り絵は何歳になっても楽しいものだと感じた。（2年）
- ・ ミュシャの絵が思った以上に細かく転写するのが難しかった。また、コピックを初めて使ったので、どうなるかと不安だったが、沢山の色を用いて、色を塗れたので良かったし、楽しかった。（2年）

このように学生側は、大学内の授業における試作制作と、美術館におけるワークショップの活動サポートの双方を体験し、それぞれに学びがあったことが伺える。大学内では自身が制作に携わることで、大変だったことや達成感を味わえたこと、鑑賞のみでは分からなかったことを体感として得られたようである。また、美術館での活動では、最初は様子を見ていた学生たちも参加者から質問を受けたり、画材の使い方を説明するうちに、少しずつ関わりを持ち、コミュニケーションが取れるようになっていく様子が見られた。

美術の題材開発は自身がいくら楽しい活動だと感じて、その題材に取り組む人々の実態に適応し、教育的効果を上げることが必要である。今回の活動は学校現場ではなく、生涯学習という場で、当日を迎えないと、どのような年代や背景を持つ人が参加するか分からないといった少しハードルの高いものであった。しかし、上記の感想には、手が止まっている人へのアドバイスの難しさも挙げられていたように、このような実地での経験が、今後の教育実習等でも生かされていくこととなるだろう。

V おわりに

本報告では冒頭にも述べたように、美術館連携事業として、二つの新規性があった。一つ目は、これまでの連携事業では主たる参加者が子どもを対象にすることが多かったのに対し、本事業では大人を対象として新たにプログラムを構築できたという点である。大人を対象にしたワークショップのプログラムに必要なことは、制作の行為自体は誰にでも出来るもので、少し難易度を高めることが有効であろう。また、日常ではなかなか作れない制作時間の創出が、個々と向き合うことに繋がり、満足度が高まるといえる。日々、それぞれの生活に追われる中、集中して創造的な活動に携わる機会を持つことで、人によっては、リフレッシュ、癒し、アートを通じた活力の向上などのきっかけになると考えられる。

二つ目は、イラストというジャンルを美術館のワークショップの題材に取り上げることで、幅広い年齢層を対象とした、生涯学習としてのイラスト制作の可能性を見出すことが出来た点である。イラストは紙とペンがあればだれにでも気軽に携わることのできる題材である。とはいえ、絵がさほど得意ではない人にとって、日常的にイラストを描くことは少ない。そのような中で、自らテーマを設定して描くのではなく、美しいと感じるミュシャの絵を題材に、コラージュやトレースといった手法で線を引く行為そのものをイラスト制作として取り入れることで、ハードルが下がり、憧れの絵を模倣することが出来る。それと同時にトレースをすることは、作品を鑑賞するだけでは気づかない、作者の線や色使いといった息づかいも感じる事が出来る。このように、企画展示によっては、イラストを題材としたワークショップも十分に学びの可能性があるものとしてとらえられるだろう。

今後の課題としては、本学の美術館連携事業でも大人向けのワークショップの題材を開発するとともに、それぞれの美術館においても企画展示や美術館の特色を生かし、子どもから大人まで幅広い人を対象としたプログラムを実施することで、様々な来館者にアプローチし、教育普及事業の一端を担っていくことが挙げられる。

謝辞：本事業を進めるにあたって、高崎市立美術館館長塚越潤様、学芸員柴田純江様には大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

*本研究は群馬県立女子大学特定教育・研究費「2022年度 群馬県内の美術館連携を図る教育普及プログラムの開発と実践」を活用したものである。

【図の出典】

図1～図2 筆者撮影 (2023/09/28)

図3 高崎市立美術館 展覧会チラシ

図4 尾形寿行(編)『アール・ヌーヴォーの華 アルフォンス・ミュシャ作品集』2016、p.53

図5 筆者作成 (2022/10/10)

図6 筆者撮影 (2023/09/13)

図7～9 筆者撮影 (2022/10/31)

図10～11 筆者撮影 (2022/11/6)

図12～20 筆者撮影 (2022/11/20)

なお、出典にあたり、学生及び参加者、美術館関係者には承諾を得ている。

註

- 1) これまでも、各美術館での連携事業に関する報告は、群馬県立女子大学紀要35号（2014年）「富岡市立美術博物館における学生による教育普及プログラムの開発と実践」、同38号（2017年）「群馬県立館林美術館における教育普及プログラムの開発と実践」、同41号（2020年）「高崎市立美術館における連携事業の実践に関する報告」、同43号（2022年）「コロナ禍における群馬県内の美術館連携事業の実践に関する報告」においてそれぞれ報告している。
- 2) 2022年度は高崎市立美術館以外では、群馬県立館林美術館、群馬県立近代美術館、富岡市立美術博物館、大川美術館と連携事業を行った。なお、県内の美術館は毎年継続して事業を実施する館と依頼があった時にイレギュラーに実施する館とが存在するが、ほとんどの館は毎年継続しての事業実施である。表題の高崎市立美術館に関しては後者のイレギュラーに実施する館である。
- 3) 高崎市立美術館 HP「高崎市立美術館について」参照 URL：<https://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2014011000421/>（最終アクセス2023/09/07）
- 4) 高崎市立美術館『高崎市美術館収蔵作品目録2022』参照、なお作品数は組作品（連作）、版画集は1組1点とし、のべ数を記載している。「油彩等」には油彩、テンペラ、合成樹脂系絵具、混合技法等による作品が含まれる。「水彩・素描」には水彩、グアッシュ、パステル、鉛筆、木炭、インク、墨等による作品が含まれる。URL：<http://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2014011000353/files/collection-list.pdf>（最終アクセス2023/09/07）
- 5) 高崎市立美術館『高崎市美術館年報2016-2020』pp.85-90参照 URL：<http://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2014011000353/files/annual2016-2020.pdf>（最終アクセス2023/09/07）
- 6) 高崎市立美術館 HP「アルフォンス・ミュシャ展 美しき時代の女神たち」参照 URL：<https://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2022081000029/>（最終アクセス2023/09/07）
- 7) 本稿では、ミュシャの作品については「イラストレーション」、ワークショップのタイトル及び内容としては「イラスト」という略語を用いるが、同義としてみなす。
- 8) 「Artwords（アートワード）」現代美術用語辞典参照 URL：<https://artscape.jp/artword/index.php/>（最終アクセス2023/09/07）
- 9) 尾形寿行（編）『アル・ヌーヴォーの華 アルフォンス・ミュシャ作品集』株式会社尾形企画、2020、第五版、p.47参照
- 10) 千足伸之『ミュシャ装飾デザイン集増補改訂版』東京美術、2021、p.4
- 11) 本学ホームページ「美術科教育法Ⅲ」シラバス参照 URL：https://portal.gpwu.ac.jp/pt_webj/syllabus/se0020.aspx?me=EU&opi=se0010（最終アクセス2023/09/08）
- 12) アクティブ・ラーニングとは、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等」のことを指す。文部科学省「教育課程企画特別部会 論点整理 補足資料（5）アクティブ・ラーニングに関する議論」参照 URL：https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1361110_2_5.pdf（最終アクセス2023/09/11）
- 13) コピックは Too グループで開発したアルコールマーカーの名称であり、用紙類やエアブラシなどの製品を含むブランド名。コピックのマーカーは358色ものラインナップを持ち、インクや本体の品質の高さや繰り返し長く使用できる点などが評価され、デザインの作画、イラストレーション、漫画の着色、クラフトなど様々な分野で活用されている。1987年から発売を開始し、現在は世界70カ国以上で販売している。参考 URL：<https://copic.jp/about/>（最終アクセス2023/09/13）